

ノースカロライナ留学だより

Department of Cell Biology and Physiology
The University of North Carolina at Chapel Hill

中川 直樹

(ノースカロライナ大学医学部細胞生物学・生理学科)

私は現在、ノースカロライナ州 Chapel Hill にあるノースカロライナ大学の Neuroscience Center にて、Eva Anton 教授の下で研究を行っています。ノースカロライナ州に住んでいると言うと必ず「北の方にあるの？寒そうだね」と言われるのですが、隣接するサウスカロライナ州と比べて北側に位置するというだけで、実際は日本と同じくらいの緯度にあります。なので、四季もはっきりと分かれていて、春には桜が咲き、秋には紅葉を楽しむことができます。唯一、大きく異なる点としては、春になると真っ黄色の花粉が道路や車に降り積もることでしょうか。ラボの同僚いわくこの大粒の花粉は人体には無害らしいのですが、花粉症の人が見たら卒倒してしまう光景が数週間続きます。

大学のある Chapel Hill は学生の街ということもあり治安が良く、自然が豊かで街全体にのんびりとした空気が漂っています。さらに、有難いことに市内を走るバスは全て無料なので、通勤時はマイカーではなくバスを利用しています。そんな良いところがたくさんある Chapel Hill ですが、治安が良く教育水準が高いためか、家賃は周辺の街と比べて少し高めです。私はワンベットルームのアパートメントに住んでいますが、アメリカでは家の売値があまり下がらないので、長く住むのであれば庭付き一戸建てを購入してアメリカ暮らしを満喫するのも一つの手だと、今となっては思います。

私は2015年4月より現在のラボにポスドクとして留学しています。Anton 教授のラボは神経発生分野で優れた成果を挙げており、私は主に神経幹細胞の細胞極性維持機構と大脳皮質形成との関連について研究を行っています。海外留学を経験された方は、皆さん口を揃えて「アメリカの研究環境は整っている」と仰いますが、私もそれは同感です。例えば、共通機器も最新のものが導入されていますし、論文で発表されたばかりのツールもアメリカ国内であれば比較的簡単に入手出来るため、新しい技術を導入しやすいです。これはプロジェクトを進める上で大きなアドバンテージだと思います。また、Neuroscience Center では学内や他大学の研究者を招いて定期的にセミナーを開催していて、その研究室が得意とする技術や、今まさに進行中の研究を無料（しかもランチ付き）で聴講することができ、トレンドを肌で感じる事が出来ます。

今後もアメリカ式の研究生活で学んだことを活かして研究を進めていくと同時に、私の経験の中から一つでも多くのことを、これから研究を志す方々に伝えていければと考えています。最後になりましたが、このような貴重な研究留学の機会を与えてくださいました上原記念生命科学財団の皆様に、心より御礼を申し上げます。
(2018.4.24受領)



ノースカロライナ大学 Neuroscience Research Building
7階に筆者の留学先である Anton 研究室がある

ノースカロライナの風に吹かれて

Department of Cell Biology
Duke University Medical School

高野 哲也

(名古屋大学大学院医学系研究科神経情報薬理学講座)

2018年3月よりアメリカ、ノースカロライナ州のダーラムに位置するデューク大学 (Scott Soderling 研究室) へと留学しました。ダーラムはノースカロライナ州中央部に位置する都市であり、リサーチトライアングルパークの拠点地として知られています。ダーラムの気候は日本の東京とよく似た気候であり、雪もほとんど降ることはなく四季の移り変わりを楽しむこともできます。また、アメリカで毎年発表されている住みやすい街ランキング (Best Places to Live) では常に上位にランキングするなど、近年注目を集めている研究開発都市となります。

デューク大学敷地内には、2つの病院と多数の研究施設があり、その中には質量分析、顕微鏡、遺伝子改変動物の作成や動物行動解析、フローサイトメトリー、次世代シーケンスなど多くの研究部門が存在します。そして、研究者は最先端研究機器をそれぞれの研究部門の専門スタッフによる協力の元で非常に効率的に使用することが出来ます。私が留学した Soderling 研究室はデューク大学医科大学大学院の細胞生物学専攻に属する研究室の一つです。Soderling 研究室は、ポスドク4名、大学院生4名、テクニシャン3名の研究室となり、アメリカでは一般的な規模の研究室になります。Soderling 研究室では、週に一度の全体ミーティングがあり、それに加えて週に一度比較的研究テーマの近い数名程度のメンバーが議論するグループミーティングがあります。また、Soderling 研究室が所属する細胞生物学専攻内においても週に一度 In House Seminar があり、そこではポスドクや大学院生等が研究内容を発表する場が設けられています。研究室のミーティングや In House Seminar では、ピザなどの軽食を取りながらお互いの研究状況について活発な議論や情報交換が行われています。このように、研究室だけでなく専攻内の独立研究者、ポスドクや大学院生が日頃から親睦を深め、お互いに協力し切磋琢磨する環境が築き上げられていることは、自身の研究を推し進める上でも非常に良い影響をもたらしています。私が、アメリカの研究環境にて最も驚いたことは、日々研究者同士で非常に多くの情報交換を行い、それにより新たな技術や秀でていたものをすぐに取り入れるという卓越した研究進行の速さでした。実際に、デューク大学の同じ専攻内だけでも数多くの共同研究が行われており、話し合いは勿論のこと、実験に必要な研究機器や研究試薬など細部に至るまで徹底した協力関係の元で研究が進められています。

このように海外には研究者としての経験をより豊かなものにしてくれる多くの仲間達、また人生に潤いを与えてくれる環境があります。かけがえのない貴重な経験こそが、将来必ず日本にて研究を遂行する上で大きな宝物になると確信します。実際に、私も当初想像していたよりも多くのことを経験することができ、それによって私の研究に対する考え方が大きく広がったのではないかと考えています。また各国の研究者と交流を深めることで、異文化への理解、幅広い価値観が身についたように思います。このように、海外で研究をするということは、研究者としてのみならず、自分自身を見つめ直す良い機会となり、人としても大きく成長することができるように思います。もし、海外留学に少しでもご興味がありましたら、是非とも海外へと積極的に挑戦していただきたいと願っております。

最後になりましたが、私に海外留学への機会を与えてくださり、推薦して下さった名古屋大学大学院医学系研究科神経情報薬理学講座の貝淵弘三先生に心より感謝申し上げます。そして、海外留学を支援して下さった上原記念生命科学財団に深く感謝申し上げます。

(2019. 4. 17受領)